



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然写真および自然番組を通した自然の理解 : 自然写真家や自然番組制作者の意図 [全文の要約]
Author(s)	大原, 尚之
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(環境科学)
Dissertation Number	甲第13889号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78565
Type	doctoral thesis
File Information	Naoyuki_OHARA_summary.pdf



自然写真および自然番組を通した自然の理解
—自然写真家や自然番組制作者の意図—
(Understanding nature through photography and television programs:
The will of nature photographers and producers)

北海道大学 大学院環境科学院
環境起学専攻 実践環境科学コース
博士後期課程
大原尚之

学位論文要約

現在、私たちは自然写真や自然番組など、自然を題材にしたメディアを通して、自然について理解している。米国内や英国内で、過去にメディアが環境政策の実現に貢献した歴史的な事実が判明している。歴史的な事実から、写真や映像など、既存の伝統的なメディアの影響については整理されてきた。その一方で、制作者である写真家や映像制作者たちの狙い・意図については、先行研究では遡及的かつ間接的に推測されている (e.g., Dunaway, 2006; Deluca and Demo, 2000; 信岡, 2009)。本研究では、彼らの意図や制作過程を明らかにするため、第2章では道内で活躍するベテラン・新進の自然写真家を、第3章ではNHKの自然番組スタッフを対象に、フィールド調査や半構造化インタビュー、文献調査をメインとした質的調査法を行った。また、これまで彼らの持つ社会的役割やネットメディアの影響も示す。

第2章では、北海道内で活躍するベテラン・新進の自然写真家18人へのインタビューやフィールド調査、そして過去の自然写真家に関する文献調査をもとに、(1) 自然写真家が撮影前にどのような準備を経ているのか、自分で見つけてきたことと理解してきたことを一般に伝えてきた意図について、(2) 自然写真家としてのアイデンティティと、自身の役割についてどのような位置付けをしているのか(3) その意図の読み取られ方に関して、彼ら自身どのような対策と考えているのかを調べた。調査結果から、自然写真家の多くは自然科学的な知見を把握する準備段階を経てから自然写真を撮っている。被写体につい

て理解するため、自然写真家は事前に論文を読んだり、図鑑を見たり、自然科学の研究者らと積極的に関わったりすることで、被写体にまつわる自然科学的な知見をより多く得ようとしている。自然写真家にとって、自然写真は野外観察をとおしてできた、専門的かつ個人的な経験によって作られたものである。それゆえに、彼らの自然写真はその写真を撮る動機になっている。自然写真家の意図とは、被写体について撮影者自身がどのような理解を得ているのかを写真として証明することである。自然写真家としてのアイデンティティの構築と、その目的意識を自身の作品に落とし込む際に、彼は自分たちのプロフェッショナリズムについて葛藤と矛盾を抱えている。調査では、写真家が持っていた写真の本来の意図が、ストックフォトの使用によって隠れたり消されたりすることがあることも判明した。ストックフォトのシステムを通した写真画像の拡散は、自然写真家が提供してくれる自然科学に関する知識について、読者が得る機会を奪われている可能性がある。この状態が続けば自然科学的にみて質の保証がされている自然写真を見る側が得ることが今後難しくなるかもしれない。

第3章では、先行研究で自然番組の特徴と言われている *Absence of Science* (以下 AoS) に注目して調査を進めた。AoS とは、自然番組には自然科学知見は描かれてはいない、という意見であり、自然番組研究では広く認められている説である。米国内の視聴者に合わせた調整が行われたケースや、映画的な物語構成をつくるために、都合の悪い野生の生態が省略された歴史的事実が AoS 論を支えてきた。しかし、この AoS 論が提唱された 00 年代初頭と現在とでは、自然番組制作で活用される機材も違いがあるため、自然番組における自然科学との関連は 20 年前に比べて変わっている可能性がある。また、第2章の自然写真で指摘されていたように、今日のネットメディアの隆盛によって、既存のメディア制作陣がどのような危機感を持っているのか、自然番組にある課題について今一度新しく更新する必要がある。今回、NHK 制作の自然番組やその制作者たちを対象に調査し、自然番組制作で自然科学がどのような位置付けがなされてきたのかを調べ、技術やネットなどの時代変化に伴って AoS 論はどのような拡張(拡大解釈)と修正ができるのかを検証した。具体的には(1)NHK 制作の自然番組で AoS が容易に成り立つのか(2)自然番組にも第2章で扱った自然写真との共通点が見られるのか(3)ネットメディアが AoS をどう拡張させるのかに注目して調査した。その結果、NHK 制作の自然番組は「映像詩 里山」のよ

うに、AoS と言われるような科学情報の可視化があまりされない自然番組を制作している一方、「ダーウィンが来た！」のように、自然科学の情報を伝えることを中心に置いた情報番組的なものも制作している。番組制作における自然科学知見の取り扱い方について、NHK は目指す番組の方向性にそれぞれ合わせて、その知見を情報として可視化するかを検討し、AoS らしい番組作り、AoS でない番組作りの使い分けをしていたことがわかった。そして NHK 制作陣からの証言から、NHK と BBC が制作する自然番組では、長年使ってきた撮影機材の影響を受けて、番組の目指す方向性ができており、先行研究で BBC が AoS と言われてきた主要因がフィルム撮影にあることが判明した。こうした機材に影響された番組の方向性の違いはあるが、NHK と BBC は、ともに自然科学的な知見に対して、念密なリサーチ期間を常に設けている。番組制作者にとって自然科学とは、自然写真家にとっての自然科学と同様に、制作前段階で番組が自然科学からみて質的な保証がなされているのかを確かめる重要な過程の一つになっている。近年では、Netflix などの VOD サービスや YouTube など、既存の TV 番組放送以外の形式で自然を題材にした番組や映像が公開されるようになった。こうした映像の多くは、環境保全メッセージや人を惹きつける綺麗な映像が多分に含まれている。この新しいメディアの普及について、NHK 制作者たちは、こうしたネットメディア発の番組・映像に自然科学的知見に対するリサーチが軽視されているのではないかと違和感を抱いている。

以上から、本論文は制作者たちの意図に関して、彼らと自然科学的知見との関係と、ネットメディアの影響による質保証に関する危機感について明らかにした。第4章では、議論がまだ必要とであると感じた部分を整理し、今後どのような点に注目して研究することが可能であるのかを論じる。第2章と第3章では、研究者自身の都合から国内で活躍する自然写真・自然番組制作者に注目したが、今後は BBC や Wildlife photography や conservation photography などに注目し、本研究で指摘されたことが日本国外に対象を広げて、どれほど適応できるのかどうかを検証したい。また、メディアを観る側が、自然写真や自然番組から自然科学知見や環境問題について強く意識することが本当にできているのか。そして、自然科学的な知見があることを、見る側にも十分にわかってもらうために、ストックフォトや今後の新しいメディアをどのようにすればいいのかを今後の研究課題としたい。